議　事　録

１．開会

２．副市長あいさつ

３．委員紹介

４．座長指名

〇川﨑 興太 委員（福島大学 共生システム理工学類 准教授）

（座長あいさつ）

・総合戦略は計画期間が５年間の短期決戦で人口減少に打ち勝っていこうと全国の自治体が取り組んでいるもの。

・中長期的なトレンドつまり人口減少はある程度はっきりしているため、短期的視点の両方を併せ持っていく必要がある。

５．議　事

◇「住みたいふるさと もとみや創生総合戦略」の概要

（１）説明事項

①「住みたいふるさと もとみや創生総合戦略」の検証

（小笠原委員）

・ふるさと回帰支援センターで郡山市近辺を中心に探していたところ、本宮市を紹介していただいた。

・本宮市でもこれまでに首都圏で移住相談会を実施しているようだが、そうした相談会に参加できればよかった。移住相談会の実施回数が増えていくのはいいことだと思う。

（遠藤委員）

・都会からではなく、震災の影響で宮城県石巻市から本宮市に移住してきた。

・移住相談会について、都会からだけを意識しているように感じる。現実的に東北の近隣自治体でも実施できたらいいと思う。マイホーム取得奨励金の実績を見ても、関東圏よりは県内自治体や東北の自治体が多いことが分かる。

《川﨑座長》

Ｑ．県外から本宮市に転入されている方は、本宮市出身の方が大半であるのか。

《事務局》

Ａ．現在、調査しているところであり、まとまり次第、ご報告させていただく。

《川﨑座長》

・仮に本宮市出身の方が多いとすれば、圧倒的に多くは東京圏からの転入かもしれないが、3 割程度は宮城県等の東北地方からの転入もあるとすると、東北地方での移住相談会も効果的かもしれない。

（渡辺委員）

・本宮市で生まれ育った子どもたちが、将来的には本宮市に戻ってきてほしいと思う。
・本宮市は福島地区と郡山地区の高校に通える共通学区で特別な環境。市外の高校に通う子どもたちが大半である。地元の本宮高校や安達管内の安達高校に魅力を感じて志願するような状況になれば好ましい。
・子どもたちが考えている夢を叶えてあげたい想いがある一方で、地元の本宮はこんなに良いところだということを何らかの形で子どもたちに教えていけたらいい。

（黒川委員）

・次の高校入試から方法が変わり、本宮高校も魅力ある学校として受験生をたくさん集めたいと考えている。
・本宮高校に通学している生徒の中で郡山市出身が一番多い。高校と地域が一緒に活動していくことも踏まえて、郡山市出身の生徒たちに本宮市の魅力を感じてもらえると、もしかすると 10 年後、20 年後につながっていくのではないかと思う。
・個人的には、3 年前に郡山市に住宅を購入したが、高速道路のＩＣに近いこと三春方面に近いこと、駅からは多少遠くてもいいことを条件にあげていた。郡山市街から郡山駅までバスで行く場合と本宮駅から郡山駅まで電車で行く場合、同じ所要時間で行けることを知っていたら違う展開があったかもしれない。
・意外と本宮市が知られていない。本宮高校に来る郡山市の生徒たちが、高校３年間で本宮市の良さを十分に感じてもらい、その子どもたちが将来住む場所を考える際に、本宮市が選択肢に入るようになればいい。

《黒川委員》

Ｑ．社会動態は目標値に達していないが、個人住民税が目標を達成している原因は。

《事務局》

Ａ．本市は工業が盛んであり、第１次産業よりも第２次産業で働く方が多い。今年度から本格的に始動した「こおりやま広域圏」15 市町村の中でも所得に関しては、圏域の中で一番が高いというデータがある。第２次・第３次産業に勤めている割合が高いと感じているところ。また、工業出荷額についても人口１人当たりの出荷額が県内１位であることが影響していると考えられる。

（谷委員）

・条件がきちんと知られていれば、本宮市を選んでいただけると思う。
・大玉村の場合は、子育て施策について１番を目指して取り組んでいるため目立っている。本宮市も後追いではあるが同じような施策に取り組んでいるだけでなく、国道や東北本線が通っていることなど住みよい環境にある。
・さまざまな施策に地道に取り組んできた成果が、年少人口がそれほど減少していない現状につながっている。
・長期的な視点を持って取り組むことが大切である。
・国において外国人労働者の受入を進めていることとしており、大企業でも外国人留学生を採用の対象としている。

・本宮市に公立の日本語学校をつくり外国人を受入れられるような体制が整えば将来的にもいいと感じる。報道等で問題を起こす外国人もいるが、基本的には留学生として学びに来ている方が多く、結局のところ日本人と一緒で、その人がどこの人というよりもその人がどういう人かによる。
・今までの地道な施策以外にも違う観点から見た施策も必要なのではないか。

《川﨑座長》

・本宮市では英国との交流を深めているが、ヨーロッパだけではなくアジア考慮していく必要があるという提案だった。
・長期的な視点の話が合ったが、昨年度策定した「本宮市第 2 次総合計画」は 10 年間を期間としており、中期的な計画となっている。

（渡邉委員）

・イメージ戦略の効果が出ているのではないか。
・本宮市のイメージの「核」となるものがあるといい。図書館や大人もお金をかけずにいられるような居場所があれば。施設的なものだけでなくてもいい。
・子どもを育てるときに便利さだけでなく、レベルの高い教育があればいいと思う。

（大場委員）

・これからの時代、質の高い教育が遍く求められている。そういう意味では外国人に対しても十分教育し、受入れていくことは重要である。
・本宮市もこおりやま広域圏としても外国人に優しい、あるいは若年者に対して高等な教育が行われ、生涯教育も行われるような取組が実施されればいい。
・本研究所でもアウトリーチ活動としてさまざまな研究の内容やＳＤＧｓのセミナー等も行っている。

（三瓶委員）

・転入者について、転勤族で本宮市に転入したのか、居住を目的として転入されたのかの分析が必要。
・本宮の商店街は空き店舗が少なく頑張っている印象。
・市内には大きな企業がたくさんある。そこで働いている従業員のうち何%が本宮市に住んでいるのか。そうした企業へのアプローチが必要なのではないか。そのあたりの分析も必要ではないか。

（保住委員）

・旧白沢地区の人口が減少している話を聞く。
・婚活を含めた出会いの場が必要。結婚しないと子どもの数も減っていく。
・後継者問題があり、今後数年で事業継承ができない事業所が出てくる。後継者問題が人口減少にも繋がっていく。

（平委員）

・出生数が減少している。職業柄まわりに子どもが多い環境にいるが、こんなに減っているとは思わなかった。
・平成 28 年から平成 29 年に出生数が急減している原因は何か。
・妊娠しようとしているお母さん、2 人目、3 人目を出産しようとしているお母さんたちが、どういう環境があったら妊娠出産しようと思うのか、そのあたりの課題を生の現場から汲んでいくことも私たちの役割ではないかと感じた。

《川﨑座長》

Ｑ．そういうお母さんたちはどのようなことを言っているか。

《平委員》

Ａ．出産施設がないことが一番多い。妊婦健診に行くお母さんたちの子どもを預かることがあるが、2 時間では終わらず 3 時間程度かかる。そうすると金額的にも嵩んでしまう。
お腹が大きくなってくると車の運転が困難になってくる。妊婦タクシーの制度があると聞いた。
ＮＰＯ法人のサービスと公共サービスの縦と横の繋がりを持って情報を集約してお母さんたちに伝えていきたい。

《川﨑座長》

Ｑ．妊婦タクシーは市役所で実施するのか。

《事務局》

Ａ．今年度の新規事業として「出産ママタクシー」事業を立ち上げた。出産時と 1 か月健診時に市外の医療機関を受診される場合に、上限 1 万円でタクシーを利用できる。

（鈴木委員）

・住みよさが知られていない。
・社会動態が増加しているが、白沢地区と本宮地区の地域格差が生じている。団地を造成しているのも本宮地区のみで、白沢地区は合併以降人口減少が続いている。白沢地域の定住人口をどう増やしていくかは市の重要施策にもあるが、そのあたりの方策が課題となってくるのではないか。
・定住にあたっては家族で来る場合、働く場が必要なので就業支援や就農支援が必要ではないか。
・周産期医療について、当面は出産ママタクシーでの対応になるが抜本的な解決にはならないので、どうしていくのかが課題。

《川﨑座長》

・オール本宮で語るのが必ずしも適切ではない部分がある。今後のまちのあり方については、どんなに出生率を上げても減少基調に入っていかざるを得ない中で、まちのかたちをどう描いていくかについては、総合戦略の第 1 版には含まれていない。そういったことも踏まえて次期総合戦略に含めるかも検討が必要ではないかと思う。

（佐藤委員）

・妻の職場がある郡山市や実家の福島市にも利便性が高く、住みやすいまちだと感じた。
・町全体でも子育てしやすい環境にあると感じている。公園もあり、商店もあり見守り体制があるように感じている。
・産婦人科があれば、子育て世代の移住に繋がるのではないか。
・本宮から転出した方でふるさと出産される方が多いと聞くので、一旦地元を離れてもやっぱり本宮がいいと感じる人がいるのではないかと思う。
・ＳＮＳで情報を得ることが多い。Twitter や Instagram といった活用が足りず、若者が食いつきそうな施設や資源がある中でまだまだ発信しきれていない。もったいない。

（谷委員）

・主人が谷病院をやっているが、最後まで産婦人科をやっていた。
・産婦人科を止める 5 年 10 年くらいは、産科単体の収支は合わなかった。理由としては近隣にクリニックが増えたことや大きな病院でも診てもらえるなど、患者さんが本宮市から出て行くことが多かった。
・社会的使命として産科をやっていたが、産科を辞めた最後の原因は、助産師資格を持った職員が応募をかけても集まらなかったこと。1 人の助産師では 24 時間体制に耐えられない。
・あることには行政は何もしない。あることが当たり前で進んでいくが、新しいところには目を向けてくれる。
・商店街にしても辞めてしまって、あったら良かったのにとなる場合がある。何が何でも必要なものが無くなってしまうと、機材にしても人材にしても復活するためにはハードルが高くなる。
・市として継続させたいものがあれば、いろいろな手をみんなで考えていくことで持続する可能性がある。
・民間の場合、継続するためにはさまざまな要素が絡んでくる。行政と相談できるような体制があればいい。

②次期地方創生総合戦略について

＜質疑なし＞

③今後のスケジュール

＜質疑なし＞

④その他

《川﨑座長》

・マイホーム取得奨励金や宅地造成奨励金の申請について、先ほどの白沢地区の人口減少と併せてどの地域への定住が多いのか、用途地域内外の申請件数などのデータがあれば準備していただきたい。

以　上。